

英語前置詞 **of** の意味

宗宮喜代子

21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」

東京外国語大学 (TUFS) 大学院地域文化研究科

英語前置詞 of の意味

宗宮 喜代子

(東京外国語大学外国語学部教授)

序

本稿では、英語の前置詞 of が、概念の内部構造を指示する機能語であることを論じる。of については一般的に、頻繁に使用されること、多岐に渡る用法をもっていること、それでいながら空間の関係を表さない(Langacker 1995: 66; Lindstromberg: 195)こと等が知られている。of の意味は非常に抽象的だ、とも言われる。of は「大物」の前置詞でありながら意味不明だ。その of を実際に記述するにあたっては、たいていの専門書が、語源の知識と認知言語学の概念範疇に基づいて分類している。しかし、それで of の意味が明らかになったとは言いがたく、雑多な用法が羅列されて「分析」が終わっているのが現状だ。本稿では、むしろ形式意味論の基本に立ち返って、概念を集合とみなすことで of の意味を探りたいと考える。

1. コーパス分析と理論の接点

of の意味を知るには of の用法を知る必要がある、と考えるのは一見自然に思える。言語事実そのものを用法と呼ぶのであれば、確かに用法を知る必要がある。しかし事実を分析し分類した結果を用法と呼ぶのであれば、用法はかえって真実を隠してしまう危険がある。現実に客観的に存在するのは言語事実のみだ。

言語事実を集めたものはコーパスと呼ばれる。研究者たちはできるだけ多くの言語事実を集めて、そこから言語の真実を抽出しようとする。完全な言語資料総体は入手不可能であるが、できる限りコーパスの規模を大きくすることで客観性が増す。しかし逆説的に、コーパスの客観性が増すにつれ、そこから直接に結論を導き出すことは困難になってくる。コーパスは言語事実の森だ。迷い込んだら出られない。

コーパスを分析するには方法が必要だ。実際には、言語学者たちは、限られた量のコーパスから、語源と直観と理論に基づいて結論を導き出している。かなり大胆な帰納推理を行っているのだ。結論は用法の列挙で終わることもあれば、さらなる一般化を目指す研究もある。

分析の方法が異なればコーパスの提示法も異なってくる。現実が違って見えてくる。このように、言語の真実や正しさは相対的で主観的になりがちだ。それでも正しく分析すれば真実が見える、と言語学者たちは信じている。その分析の是非を判断する基準は、方法の一貫性、結果として得られた記述の簡潔性と整合性、洞察の有無、といったところだ。

うか。

本稿では、続く第2～5節で、ofに関するリンドストロームバーグ(S. Lindstromberg 1997)の分析を例にとってコーパスと理論のせめぎ合いを観察する。リンドストロームバーグは、レイコフ(G. Lakoff)らの認知言語学の理論を援用しながらも理論一辺倒に走らず、代表的な言語事実を忠実に記述しようとする姿勢を示している。語源への考慮もあって、分析の対象として適正である。

第6～11節では of の意味が概念指示にあることを論じる。この部分が本稿の主眼であり、中でも第6節で主な主張を述べる。本稿の視点からコーパスを観察するとリンドストロームバーグが提示した例文が理解しやすくなり、分類の方法も違ってくる。

2. 語源について

of は古英語(OE)の頃から 'away, away from' という「分離」の意味で用いられていた。一方で「材料」、「～から成る」の意味と、これから派生したと考えられる the city of Rome など同格の用法も OE の頃から存在していた。a lover of hers, a portion of hemlock, one/ some of～のようないわゆる部分属格の用法も存在した。

1400 年頃からは off が of と並んで用いられるようになり、17 世紀以降は of に代わって off が 'away, away from' を表すようになった。これに伴って of が「分離」の意味を喪失した時、of は非空間的になった。それでも of は依然として多義的であった上に、1066 年のノルマン征服以来はフランス語の de の訳語としても用いられるなど、意味の上で複雑な発達を遂げて現在に至っている。

「of の意味は非空間」と言うだけではあまりに漠然としている。of には、独立した語として残存するに足るどんな意味が残されているのだろうか。言い換えれば、of は意味をもつのだろうか。ここで考察のヒントとなるのは次の2点である。

- (i) of は副詞用法をもたず、もっぱら前置詞として用いられる
- (ii) of は「分離」以外の関係、つまり「非分離」を表す

このうち(i)は客観的な事実だ。(ii)はリンドストロームバーグら英語母語話者が直観として繰り返し述べるところである。of には空間的な動きが感じられないのだ。このことは、「分離」の意味を off に明け渡した of ならば当然ではある。

さて、語源の知識に後押しされるように、リンドストロームバーグは次の(1)～(3)を含む幾つかを古来の「分離」の意味の名残りを示す例として挙げている(L: 203)。

- (1) Go out of the house and look at the sky.
- (2) The arrow flew wide of the target and hit a car.
- (3) We live to the east of Canterbury.

ここで、われわれ外国人研究者にとってヒントとなるのは、母語話者の直観だ。彼らは

ofの意味を無意識に知っている。彼らは何かに反応して「古来の名残り」や「分離」を感じ取っているのだ。何に反応しているのだろうか。

答えは対象の数である。上の例はどれも、2 つ以上の別個の対象を念頭に置かなければ理解できない。(1)を理解するには「家」と「外」を関連づけなければならない。(2)には「まと」と「まと外れの空間」、(3)には「カンタベリー」と「カンタベリーの東方の地域」という別個の対象が必要である。各組の2者は空間的な関係にあり、そこから距離感が生じる。一方、たとえば the outside of the house では、見つめるべき対象は「家」のみだ。距離は生じない。「家の外側」は「家(の一部)」だからだ。これなどは現代の用法である。

母語話者の直観は常に信頼できるとは限らない。リンドストロームバーグは次のような例も古来の「分離」を表す、としている。

(4) take leave of someone

(5) That was kind/nice/stupid/silly of you.

しかし本稿では、(4)と(5)の of は2者間の関係を表しておらず、従って非空間的な現代の of の意味で用いられていると考える。本稿ではこれらを「動詞・形容詞+of+名詞」の一般形として「10. 動詞のあとの of、形容詞のあとの of」で扱う。リンドストロームバーグの分析は語源の知識が災いした例だ。このようにコーパスが時に分析者の視点と知識によって歪められ、「用法」と呼ばれることは先にも触れた。

2者関係を off に譲った of は、現代ではひとつの対象の内側の関係を表すようになった。of は概念を外側からまるごと掴むのではなく、概念に密着し概念の内部を指し示す。いわば概念の扉を開ける鍵だ。これが、本稿の提案する of の意味である。だからこそ、of には必ず概念を担う名詞が後続する。また、概念構造の内部にもぐり込むからには、距離感の欠如は当然のことだ。

3. 帰属関係

of が部分と全体の関係を表すことは従来も認識されてきた。この関係は、of の意味を集合の内部構造と考えれば、自ずと了解される。リンドストロームバーグも of が集合と下位集合、あるいは集合と成員の関係を表すことを知っており、これを帰属関係と呼んでいる(L: 195-6)。

(6) a sample/ specimen of what we sell

(7) a kind/sort/ type/ variety of dog

(8) a herd of cows

(9) a pair of pants

(10) two of these apples

(11) a kilo of the cheese

集合は抽象概念であるが、現実世界には集合に類似した関係が多く存在する。家とドアの関係、ドアとドアノブの関係、人の体と手足の関係などがこれである。こういう関係も of で表され、さらに、容器と内容物、物とそのイメージも帰属関係にある、とリンドストロームバーグは言う(L:196-98)。

- (12) the backdoor of the house
- (13) the contents of this package
- (14) the citizens of France
- (15) This one is a counterpart/ copy/ duplicate of that one.
- (16) a map of Berlin
- (17) They have no idea of hygiene.
- (18) a friend of mine

実際には、(12)～(18)には「帰属関係」で片づかない多様な関係が混在している。リンドストロームバーグは認知言語学に倣い、前置詞に先行する名詞を *subject*(つまり *trajector*)、前置詞に後続する名詞を *landmark* と呼んでひとまとめにしているが、名称を統一しても意味の多様性を解明したことにはならない。個々の例に関しては「部分と全体」(12)、「中身と容器」(13)(14)、「イメージと実物」(15)～(17)、関係を表す名詞とその対応物(18)などと呼んでいるが、分析はうまくいっていない。認知言語学の理論が言語事実をもてあまして「お手あげ状態」であることが見て取れる。

本稿では、of は集合の内的構成を指示すると考える。内的構成については後述するとし、それは帰属関係を含む重層的な構造を呈する。それでいながら集合の内的構成は、話者にとって既知のことがらである。of のような小さな語が多様な意味を想起させるのは、of が既知で複雑な全体性をまるごと呼び起こすからに他ならない。

4. もっと近い関係

「帰属関係より近い(intimate)関係」としては次の例が挙げられている(L: 199)。

- (19) the City of New York// the Republic of Korea
- (20) They got an increase of two pounds.
- (21) a giant of a man// a hell of a drive// a distance of 5 miles

これらの例で of は「同格」を合図し、意味はもたない、とリンドストロームバーグは言う(“In such examples as these *of* seems to have no meaning at all.” (p. 199)。これは敗北宣言に等しい。

一方で、次の例が表す関係には名前がつけられる (L: 200-1)。

- (22) the blue of the sky// the height of that tree.
- (23) He is a man of means.// She is a woman of 37.
- (24) the swelling of his stomach// the howling of the dogs
- (25) the delivery of the goods
- (26) the inventor of the telephone
- (27) a table made of wood// a sky of blue

(22)、(23)は物の特質、(24)は動作主の動作、(25)は被動者に起こる変化、(26)は起点や創造者、(27)は物質や物質から作る製品を表すとリンDstロームバーグは言う。ここには先のイメージスキーマの理論から視線を移して、今度は意味役割の理論に助けを求める姿勢が見られる。しかし結果は空しく、(27)が(26)の逆の関係であると言うに至って、分析は頓挫していると言わざるをえない。

本稿では、確かに of には概念的な意味は無いと考える。しかし指示という種類の意味がある。of は概念構造の全体性を指示することによって理解を促す。

5. 他の前置詞との対比

ここまでのところ、語源、直観、理論、のどれもが部分的にしか信頼できないことを見た。特に、場当たりの理論を援用しても全く空しいことが分かった。しかし、せめて記述的妥当性を得るべく、ふたたび母語話者の直観に依存して他の前置詞と比較してみよう(L: 202; 205-6; 224; 237)。

- (28-a) I dreamed of you.
- (28-b) I dreamed about you.
- (29-a) The duke deprived the peasants of/*from all their livestock.
- (29-b) The duke took all livestock from/off the peasants.
- (30-a) Frost is evidence of below freezing temperatures.
- (30-b) Do you have any evidence for that outrageous assertion?
- (31-a) Dale has been a good friend of mine.
- (31-b) Dale has been a good friend to me.

リンDstロームバーグは、of の方が about より complete かつ direct だと言う。このため(28-a)では you が夢の中の立役者であったのに対して(28-b)では焦点が you に当たっていない(L: 202)。

of はまた、動きの欠如を特徴とする。(29-a)では、必ずしも家畜が移動したとは限らず、所有権の移譲があっただけで、実際には引き続き農夫が家畜の世話をしたかもしれない。この点で移動の含意される(29-b)と異なる(L: 205-6)。

(30-a)についてリンDstロームバーグは、「もっとも抽象的な前置詞」である of は 2 つの名詞句を繋ぐだけだと言う(L: 224)。一方(30-b)では evidence が assertion をもたらす関

係が描写される(L: 224)。また(31-a)も of のため動きが欠如しているが、(31-b)の方は to があり、実際に行き来する交友関係をイメージさせる(L: 237)。

ラネカー(R. Langacker)の直観を借りて of、on、to を比べよう。「びんの底」「びんのラベル」「びんのふた」は the bottom/label/lid of the jar と言える。「ラベル」と「ふた」は the label/lid on the jar とも言えるし、「ふた」は the lid to the jar とも言える。「びんの底」は of としか共起しない。of は物に内在する部分・全体関係を表し、on は2つの別個の物が接触し一方が他方を支えていることを表し、to は2つの物が離れていながら1つのまとまりをなすことを表すからだ(Langacker 1999: 74)。言い換えれば、ラベルとふたをびんの一部分と解釈した時には of を用いるということだ。

実際には of は部分・全体のみでなく多様な関係を表す。この現実に対応するためにラネカーは、of の意味を an intrinsic relationship of some kind between the two participants(2つの参与者間の本来的関係)と定義し、これにより of が動作主と動作(the chirping of birds)、物と材質(a ring of gold)、もの自体(the State of California)、人間関係(an acquaintance of Bill)などを広く表すことを説明しようとしている(Langacker 1999: 76-77)。ここで「2つの参与者」という別個の存在が想定されていることに注目したい。ラネカーは部分と全体を2つの参与者として捉えている。

このように、他の前置詞との比較から、母語話者が of について直観的にもっている特徴が浮かび上がった。先に第2節で注目した特徴(i)(ii)と合わせてまとめてみよう。

- (i) of は副詞用法をもたず、もっぱら前置詞として用いられる
- (ii) of は「分離」以外の関係つまり「非分離」を表す
- (iii) of は complete
- (iv) of は direct
- (v) of は動きが欠如
- (vi) of は抽象的、つまり意味が欠如
- (vii) of は intrinsic

これら(i)~(vii)の直観を総合するような意味が of にあるのだろうか。本稿はこの間にイエスと答える。complete と direct がいったいどんな感じを言うのかも含めて、以下では本稿の提案する of の意味を体系的に記述する。

6. 概念の構造

空間における2者間の関係を表さなくなった時、of は概念的になった。of は空間から意味をもらうことがなくなり、代わりに1つの物から意味をもらうようになった。ただし、例えば apple、lion、house、などのように特定の物の意味を表すのではなく、すべての物が共通にもっている意味を表すようになったのである。言い換えれば of は、概念が共通にもっている構造を指し示すようになった。

次の図1と図2は、本稿が提案する概念構造の一般形を表している。

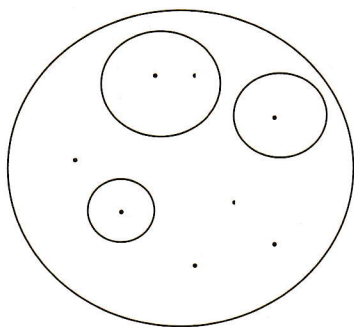


図1 概念構造1：集合と成員

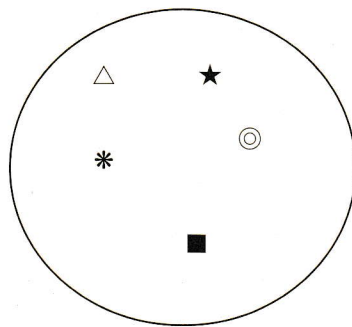


図2 概念構造2：成員の内的構成

概念構造1と2は合わせて1つの構造であるが、解説の便宜上2つに分けた。概念構造1は集合、下位集合、成員、を表す。下位集合と成員の数は任意とする。例えば *house* という語を集合に置き換えて考えてみよう。*house* という集合は、*house* であるという特質をもつあらゆる物すなわち成員で成り立つ。全ての成員が一堂に会することは不可能であり、当然ながら集合は抽象概念である。従って個々の成員も概念である。

図1の中で成員は点によって表されているが、実際には個々の成員は内部を持たない点ではなく、多様な特質の束である。図2は点の内的構成を抽象的に示している。概念は図1と図2を合わせた重層的な構造体である。*of*はこの全体像を喚起する。

ここで、集合について述べておきたい。集合自体は、概念を表す他にも命題を表したり述語を表したりする。*house* という集合が成員をひとつ以上もっている図式は、*There is a house/ There are some houses.* という文の命題を表すと解釈できる。また、この中の成員を1つ特定して *a house* と呼ぶこともできるし、いくつかをまとめて *a row of houses* とも言える。どれも、集合と成員の関係に由来する表現である。

実在する個体は、集合に属さなくともそれ自体で *Alice* などとして存在する。*Alice* という固有名を *a* とし、*run* という集合に *a* が成員として属していれば、*Alice runs.* という命題が表される。*girl* に属していれば *Alice is a girl.* となる。

run という集合が *chicken* という集合を下位集合として包摂している時には *Every chicken runs/ All chickens run.* が可能である。一方、成員の有無に頓着せず集合だけを意識すれば、2つの集合は各々、*run* と *chicken* という述語を表す。ただし、この時には、**all chickens of run* は不可能である。*of* には概念構造をもつ名詞が後続しなければならない。

概念構造をもつ名詞には、本稿で呼ぶところの「個体概念」も含まれる。個体概念とは、集合と成員の関係によって特定された個体を表す名詞のことである。*the house* などは個体概念である。実在の *Alice* などは個体概念ではなく個体である。図1と図2で成員と呼ぶものは個体概念である。

では、上の集合図のうち図1をもとに、集合と成員について例を見てみよう。以下、本稿独自の例文は①②などの記号で示し、必要に応じて出典を[]で示す。

- ① The carpenter has built some of the fine houses.
- ② There was a row of trees on the street.
- ③ They occupied a surprising amount of space in the kitchen.

[O. Henry: 23]

- ④ three quarters of the roll (of toilet paper) [O. H.: 48]

①と②は、house、tree の集合に存在する成員を数量的に捉えている。③と④は不可算名詞の集合・成員関係を表す。③④と同じ類の表現として a cup of tea などがある。「カップ」が重要なのではなく、カップ一杯分という量を表すものと考えてここに分類する。a lump of sugar など単位を表す語もこの類だ。She ate a tin of peanut butter. [O. H.: 30]は、語彙的な意味を重視して「ピーナツバターの缶」とみなすか、量的な側面を重視して「一缶分のピーナツバター」と解釈するかで分類が分かれるところだ。第一の読みでは「彼女」は缶を食べたことになる。

次に、再び図 1 をもとに、集合と下位集合について見てみよう。たとえば house という集合は、private house、country house、farmhouse、boarding house、condominium 等さまざまな下位集合に分けることができる。some of the houses などが集合と成員を見つめた表現である一方、A castle is a (kind of) house.などは集合と下位集合を見つめた表現である。下位集合もまた集合であるため、下位集合の成員は共通の特質をもっている。さまざまな castle が「castle である」という特質によって house の下位集合を形成する。

しかし集合・成員関係と違って、集合・下位集合の関係は*the castle of house などとは言えず、kind、variety など下位集合を標示する「分類語」で表す。⑥では period が時間を下位集合に範疇化する。下位集合は成員を何らかの基準でまとめたものだが、その基準自体は注目されない。of は下位集合のレベルを突き抜けて、成員と集合の関係に照準を当てる。

- (7) a kind/ sort/ type/ variety of dog

- ⑤-a A castle is a kind of house.

- ⑤-b *the castle of house

- ⑥ this period of time [O. H.: 6]

次に、成員がひとつしか存在しない集合を「個体集合」と呼ぼう。個体集合の場合には、集合、下位集合、成員は同等になる。the City of New York (あるいは the State of New York) などがその例だ。この場合には、New York は個体集合の名前であり、city はその特質である。通常、集合とその特質は同じ表現で表され、たとえば house の集合は house と呼ばれる。個体集合の場合も単に New York と言えば済む話だ。あるいは単に the City でも良い。しかし、あえて名称を分裂させることで念入りでもったいぶった感じが出る。分裂させるにあたっては、固有名詞らしい方が集合の名前になり、普通名詞らしい方が集合の特質になる。従ってこれを逆にした*New York of the City などと言わない。以下に the City of New York を含めて同じ類の例を挙げる。

- ⑦ the field of linguistics
- (17) They have no idea of hygiene.
- (19) the City of New York// the Republic of Korea
- (20) They got an increase of two pounds.
- (21) a distance of 5 miles

⑦では linguistics と field は同じ対象の名前と特質、(17)も「衛生観念」という個体集合を hygiene と idea で外側と内側から把握したものである。(19)はすでに触れた。(20)でも two pounds が集合の名前であり、increase が集合の内容を解説している。(21)も同様である。ちなみに、人の固有名の場合は分裂が許されない(*the Queen of Mary)。また代名詞も通常 of に後続しない(*the idea of it)。どちらも指示性が高く、集合によって理解することが妥当でないためと思われる。

最後に、図2をもとに、個体概念とその特質について見てみよう。これ以降は特に必要の無い限り「個体概念」を「個体」と呼ぶ。図1で集合の成員として点で表示されている個体は実際にはさまざまな特質を有する複合体である。点は内部をもっているのだ。ちなみに、そこには当然、集合の成員であるための特質も含まれる。たとえばある特定の家は、屋根、ドア、窓、外側、内側、大小、形状、新旧、色、といった特質に加えて必ず「家である」という特質をもつはずだ。

集合と成員がひとつの特質で構造を成すのと対照的に、成員すなわち個体と特質は1対多の関係にある。個体の特質は多種多様だ。例を見てみよう。

- ⑧ the outside/ inside/ roof/ location/ owner of the house
- ⑨ the University/ symbol/ history/ products of Oregon
- (12) the backdoor of the house
- (13) the contents of this package
- (14) the citizens of France
- (16) a map of Berlin
- (18) a friend of mine
- (22) the blue of the sky// the height of that tree
- (26) the inventor of the telephone

(18)で、*a friend of me は容認されない。この種の表現については第9節で述べる。

個体の特質の中には、次の例のように、個体が関与するできごとや一時的な状態も含まれる。

- ⑩ the assassination of Kennedy
- ⑪ the assassination of Oswald
- (24) the swelling of his stomach// the howling of the dogs

(25) the delivery of the goods

このうち(24)と(25)はリンドストロームバーグが各々、動作主の動作、被動者に起こる変化、として分類した例である。本稿では、個体が獲得した経験を個体の特質とみなすことで一貫した説明ができる。

注目すべきは、できごとを名詞句で表現する時には、ofに後続する名詞が動作主か被動者かという情報は消え、個体と特質の関係に変容することだ。そのことは⑩⑪からも明らかである。主語・目的語を備えた文(Oswald assassinated Kennedy)は因果関係を語順に上乗せして表現するため、語の意味役割が見えるが、名詞句は平面的な見取り図のようにできごとを提示する。因果の関係は語彙情報と百科事典的知識から推測するか、あるいは前置詞に依存して理解することになる。⑪はofの代わりにbyも可能な例であり、byが用いられれば、知識がなくてもOswaldが動作主であることが了解できる。

以上、この節では本稿のおもな主張を解説した。これにより、第5節でリストしたofの7つの特徴のすべてが自ずと説明された。まず、ofに副詞用法がなく必ず前置詞として用いられるのは、ofの意味からして当然であることが分かった。ofはひとつの名詞が表す概念の内部構造を指示する。このため、前置詞として必ず名詞が後続するのだ。このため、概念構造をもたない代名詞の類は、通常ofに後続しない。

ofは常に図1と図2を合わせた概念構造の全体を完全(complete)な形で指示する。また、概念の内部を完全にさらけ出すことで、非常に近い所から直接的(direct)に中を見ている感じを伴う。ofは近視眼的にひとつの概念の中をじっくり見すえる1項の前置詞だ。他の指示対象は眼中になく、視点は固定している。このため空間的な動きは表さない。分離も表さない。第1節で述べたように、分離は2つの項を必要とするからである。intrinsic という特徴も、ofが1つの概念の内部を表現することを言う。

重要なこととして、ofが指示するのは個々の名詞の語彙的な構造ではなく、名詞という範疇が共通にもつ概念構造である。ofの指示対象は抽象的な構造だ。母語話者たちもこのことを無意識に知っているのか、一般的にofの意味は抽象的であると言われる。しかしofの抽象性はリンドストロームバーグが言うような語彙的意味の欠如ではなく、指示対象の抽象性にあるのだ。

7. 「逆転」の用法

この節では、前節の延長線上で2つの特殊用法を分析したい。ひとつは、個体と特質が交替したように見える用法であり、もうひとつはメタファー用法である。

個体の譲渡不可能な属性あるいは重要な特質を表す名詞は、それ自体が集合としてofに後続することができる。ただし、その特質は、単に一般的な「年齢」、「目」、「髪」ではなく、「37歳」、「青い目」(a woman of blue eyes)、「金髪」(a woman of blonde hair)「7つの切妻」(the house of (the) seven gables)など特定のでなければならない。

(23) He is a man of means.// She is a woman of 37.

(27) a sky of blue

⑫ a readable tale of horror (O. H.: xviii)

⑬ It(= the answers) all held the air of whim, of unreality. (O. H.: 24)

これらの表現を用いる時にも、話者はまず集合と成員の構造(図1)から1つの個体を拾い上げる。こうして a man が得られる。次に成員と特質の構造(図2)から、means などこの個体の特質をひとつ取り出すのだ。このプロセス自体は前節の例と変わらない。

個体と特質の関係を表す図2によれば、上の例では個体と特質の大小の関係が逆転し、特質が個体を内包する感がある。しかし、このような個体と特質の「逆転」は実は逆転ではない。

個体は特質の束である。言い換えれば、諸々の特質を表す集合のひとつずつの中にその個体が成員として含まれる。これは形式意味論では基本的な了解事である。図3はこれを表している。この中で「・」は個体を示し、各種の円は図2で△、★、*、◎、■が表した特質の集合である。従って図3は図2に等しい。

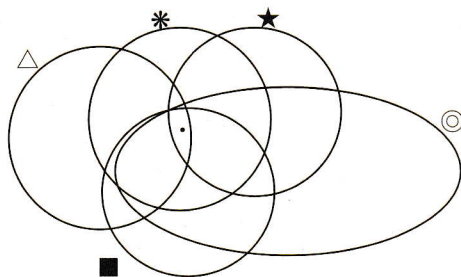


図3 個体は特質の束である

さまざまな特質の中で特に目立つものを手がかりにして個体を描写することは理に叶っている。このため a/the man、a/the woman、a/the sky で特定される個体が means、37、といった特質をもつことを a man of means、a woman of 37、などとして表す。これらは各々、「man に属する個体で means という特質を有するもの」、「woman に属する個体で 37 という特質を有するもの」を表す。図3を参照すると、この関係が分かりやすい。the woman of blue eyes、the House of the Seven Gables(『7つの切妻の家』)、the Grapes of Wrath(『怒りの葡萄』)も同様である。ちなみに the blue eyes of the woman、the seven gables of the house は図2を想起した方が分かりやすい。(例文の中で a と the、無冠詞が微妙に使い分けられているが、本稿では言及しない。)

この一方で *one of means、*a kind of 37、*something of blue などが変則的であるのは、one、kind、something が個体を特定するには曖昧すぎるからだ。*a woman of age、*a woman of hair を特殊な文脈以外では言わないのは、個体を特定した以上、年齢や髪は当然の属性として了解されるため、重複するからだ。

ふたつめの特殊用法はメタファーである。メタファー用法の「A of B」は「AのようなB」と解釈すると分かりやすい。

(21) a giant of a man// a hell of a drive

⑭ A huge fountain of white curling water rose from a foundering ship.

[O. H.: 17]

メタファー用法も概念構造の「逆転」の構図を利用する。(21)のように、ある個体を *giant* と呼びたいが現実には *giant* ではない、*man* という集合の成員ではある、という時に *a giant of a man* と言う。形式上では、これは「*giant* に属する個体で *man* という特質をもつもの」を表す。メタファー用法は先の *a man of means* のタイプと同じであり、図1と図3によって説明できる。「*hell* に属する個体(=個別経験)で *drive* という特質をもつもの」なども同様だ。

しかし「*giant* に属する個体」あるいは「*hell* に属する個別経験」という部分が非現実であるため、メタファー用法は、虚言、ものの喩えという感じを伴う。これに対して、同じく図1と図3を使って語順を入れ換えた *a man of giant statue*、*a drive of a hell-like nature* などとは *a man of means* と同様の現実的な表現である。

メタファー用法は、*of* の前後の名詞が同格でなければならない、*of* の前の名詞句が非現実を表す、など使用に際しての制約が強い有標な表現である。通常の用法では、これまでの例で見たように、*of* の前後には概念構造上のステータスの異なる名詞が生起して、集合と成員(*a row of trees*)、集合と特質(*the City of New York*)、あるいは個体と特質(*the backdoor of the house*)の関係が描写される。

8. 概念と指示

第6節で、*of* が語彙的意味をもたないことを見た。しかし *of* に「意味が無い」わけではない。先に第4節の末尾で、*of* は指示という種類の意味をもつと述べた。この節では意味の種類と指示について本稿の所見を述べる(cf. 宗宮 2005)。

フレーゲ(G. Frege)(1892)以前には、「意味(meaning)」という語は曖昧に用いられていた。改まって意味とは何かと問われれば、人は指示対象(referent)を答えた。たとえば *house* の意味は現実世界に存在する個々の家である、というように。この考えは伝統的に「指示理論(theory of reference)」と呼ばれている。

しかしフレーゲ以後、意味は「意義(sense)」と「指示(reference)」に区別された。意義とはいわゆる概念のことである。一方でソシュール(F. de Saussure)が、言語記号を提案するに際して、伝統的言語観に反発して音に対する概念の重要性を強調したことで相まって、20世紀の言語学界では意義すなわち概念こそが意味であると考えられる傾向が強くなった。言語の意味イコール概念となった。指示すなわち「意義を通して決定される指示対象」の方は、言語ではなく現実世界に属する対象として忘れられた。

フレーゲ以後も「指示理論」は意義を否定するラッセル(B. Russell)、クワイン(W. Quine)

らによって支持されたが、これは本稿の依拠する宗宮(2005)の「指示の意味論(semantics of reference)」とは似て非なるものである。宗宮では、意義と指示の2分法を想定した上で、意義を通さずに言語表現によって直接的に喚起される指示対象もあると考え、その直接的な喚起および喚起される対象を「指示」と呼ぶ。

重要なのは、言語表現が外界の事物のみでなく言語内の対象をも指示することである。個別言語は、数、性、因果関係、直立歩行など、その言語圏にとって重要な「文化的経験」を内蔵しており、非語彙的な機能語、形態素、語順の類がそれを指示する。本稿では、名詞のもつ概念構造も英語が内蔵する文化的経験のひとつであり、前置詞 *of* がそれを指示すると主張しているのである。

指示は既知のものである。たとえば英語圏のある子供が *assassination* という語の意味を知らないが *the backdoor of the house* は知っているとす。この子供は、*assassination of Kennedy* という表現を聞けば、*of* が指示する概念構造を思い浮かべることができ、*assassination* は *Kennedy* の概念構造のどこかに関わっているのだと分かる。*Kennedy* が既に特定された個体概念を表す固有名だと知っていれば、図2あるいは図3の部分に焦点を当てて考えるだろう。

母語話者たちは、概念構造を生得的に知っているのではないかもしれない。しかし *of* は「知っているはず」とばかりに繰り返し、話者の心に暗黙に訴えかける。話者たちは、知っているはずのことを無意識で手探りしながら直観を身につけてゆく。

9. 概念の形成

前置詞 *of* は、名詞の概念構造を指示するのみでなく、指示の前提条件を整えるために概念あるいは個体概念を形成する。

- ⑮-a *the tallest of the three*
- ⑮-b *the tallest in the class*
- ⑯ *That's about the size of it.* (そんなところだ)
- (15) *This one is a counterpart/ copy/ duplicate of that one.*
- (30-a) *Frost is evidence of below freezing temperatures.*
- (31-a) *Dale has been a good friend of mine.*

ここまでの分類で言えば、⑮-a は集合と成員、⑯～(31)-a は個体とその特質の関係を表す。これらは *of* による概念形成を示す良い例である。⑮-a で、*the tallest* である個体を特定するためには集合が存在しなければならない。*the three* という表現は、本来は指示のみを行う前方照応表現であって概念をもたないが、*of* によって概念化する。*of* により「その3人」はひとつの概念的なまとまり、何らかの特質を共有する3つの個体の集合、となって内部をさらけ出す。

⑯は慣用表現である。この⑯の *it* と(15)の *that one* も、言語の概念体系には属さないが、文脈の中で *of* の力によって意味内容を有する個体概念になる。(30-a)の *below freezing*

temperatures と(31-a)の mine も、of によって形成された個体概念である。Of Mice and Men(『二十日鼠と人間』)でも、of の力でネズミと人が 1 つのカテゴリーを形成する感がある。ちなみに、of を用いない⑮-b は、容器を表す表現によって現実の空間的な関係を描出している。

このように、概念構造を指示する前置詞 of はその前提として、自らが指示する対象を概念化する。特に of に先行する名詞が関係や属性を表す名詞である時には、是非ともこれらの名詞に帰属の場を与えたい。(30-a)の evidence にも帰属の場としての個体概念が必要だ。何の evidence なのか、どんな概念構造の一部なのかを示すためだ。

(31-a)が例示するように、非人間と違い me、Bill など人の代名詞や固有名は、of の後で a friend of mine、a friend of Bill's として所有格形になることが多い。人が同種の複数のものを有する場合にこの表現を使う。mine は可算の所有物の集合体としての me である。of の力による特殊な概念化だ。

通常、人を表す名詞・代名詞は of に後続せず Nicole's dog & cat などとして名詞に先行するが、この時には Nicole の特定性が dog & cat にも移行して、犬も猫も唯一性を帯びる。この唯一性は英語の特徴だ。複数あるうちの 1 つであることを表すには a dog of Nicole's、one of Nicole's dogs などとする。リンドストロームバーグによれば、非所有格表現はもったいぶった感じを伴うため、one duty of the Queen などは適切であるが、大統領時代のビル・クリントン氏に取り入ろうとする人々を friends of Bill と呼んだ時には皮肉めいた感じが伝わった(L: 196-7)。この直観から逆に、X of mine、X of Bill's の X が me や Bill にとって本質的でなく複数あって代替可能な所有物を表すことが分かる。mine や Bill's はそういう所有物の集合体を表す概念である。

ただし非所有格表現に関する母語話者の直観にはばらつきがあるようだ。ラネカーは an acquaintance of Bill(cf. 本稿 5. 他の前置詞との対比)を普通に使用している。英文法の常識として、人と時を表す名詞には John's mother、yesterday's paper など属格表現が望ましい。しかし the chief of this tribe//the father of the bride(Langacker 1999: 76)、the legs of this child//the brother of this child(Heine:37)などが実際に言われている。普通名詞を中心に単純化が起きているのかもしれない。

ラネカーは、a friend of Jill's の Jill's はジルのドミニオン(dominion)を表すと考える。ドミニオンとは「参照点モデルについて語る時に必要になる概念であり、個体が有する抽象的な領域(an abstract region characterized with respect to the reference-point relationship(Langacker 1995: 70))」である。ドミニオンを設定することで、a friend of Jill's は部分と全体という本質的(intrinsic)な関係と考えることができる。この循環論とも思える定義の中でラネカーはドミニオンに何が含まれるかを明言しないが、本稿では、「ドミニオン」なるものが存在するとすればそこには同種のもものが複数存在すると考える。

ラネカーの参照点モデルはランドマーク(landmark)とトラジェクター(trajector)の考えを援用している。これは「名詞+of+名詞」表現を 2 物間の関係とみなすことであり、本稿の見かたと相容れない。また、ドミニオンを提唱しながらもラネカーは、フランス語の Ce livre est à moi. ('This book is mine.')における à のもつ空間性を of はもたず、それより本質的な関係を表すことを認めている(66-67)。本稿では of はひとつの物の内的構成を表すと考え

るため、非空間性も本質性も自ずと説明できる。

以上、第6節から当節までは「名詞+of+名詞」の形式に限定して観察した。「動詞+of+名詞」あるいは「形容詞+of+名詞」の連結については次節で論じるが、当節のテーマである of の概念形成に関連して例を1つ挙げる。

⑰-a I heard you.

⑰-b I heard of you.

⑰-a は「君の言ったことが聞こえた、君の声が聞こえた」という意味である。これは what you said あるいは your voice を you で代用するメトニミー用法であり、you は本来の非概念的な直接指示表現である。一方⑰-b は「君のことは聞いて知っていた」という意味で、you は「君」に関するあらゆることがら、「君」を成り立たせている特性の束としての個体概念である。この you は抽象的だ。アイコン性の原則の用語を借りれば、⑰-a の I と you が実在する人間どうしであるのに対して、of を挿入して言語的距離が増した⑰-b における I と you には次元の違いという概念的距離が生じている。

言語的距離と概念的距離は about を挿入しても生じるが、その時の you はやはり I と同じ身体的存在である。about you は「あなたの回り」といった広がりを表すことで you から離れる。of の場合には、you は特質の束という概念になり、of you は「あなたの中身」といった深まりを表すことで、you から離れないまま抽象的になる(cf. 第5節(28-a)(28-b)の of と about)。

10. 動詞のあとの of、形容詞のあとの of

ここまで、「名詞+of+名詞」という形式の中で2つの名詞が生産的に結合して、集合と成員、集合と特質、個体と特質、といった概念構造内部の関係を表すことを見た。では、動詞句と形容詞句において of はどんな働きをしているのだろうか。

(4) take leave of someone

(5) That was kind/ nice/ stupid/ silly of you.

(26) a table made of wood

(28-a) I dreamed of you.

(29-a) The duke deprived the peasants of/ *from all their livestock.

⑱-a free of charge/ duty

⑱-b free from/of prejudice

⑲ conscious of the fact

これらの例が描出する事態を想像すると、of に後続する名詞はどれも重要な、ぜひとも表現したい参与者である。(4)で took leave と言っても誰のもとを去ったのかを知りたいため、つなぎの前置詞によって you を導入する。(5)では of you が無ければ、行為が親切ある

いは愚かしいということになる。その行為を誰が行ったのか、是非言いたくて of を使う。このように、自動詞や形容詞であるために項を取ることができない場合、あるいは(29-a)のように他動詞句中に目的語がすでに存在する場合に、意味情報としてもう1つ重要な項を足したい時には、余計な空間的・語彙的意味をもたず単に概念を引き寄せるだけの of が便利だ。しかも of は概念の輪郭をくっきり目立たせてくれる上に、概念の中をはっきり見せてくれる。

動詞・形容詞に of を用いる表現は生産性が低く、用法は慣用的で固定的である。慣用表現がないと of は使いにくい、ダーバン(R. Dirven: 107)はロッジ (Lodge 1989, *Nice Work*) からの興味深い例を引用している。

- ② If we all taught the same thing over and over again we should all go mad or die of boredom, and so would our students.

この例は、*go mad of というコロケーションが不可能な時に、go mad したことの直接的な原因が boredom であることを表すため是非とも of を使用したくて、die of との連言を作ることにより目的を果たした、といったところだ。

動詞・形容詞と of 句との連結は、文要素に準じる重要な概念を動詞・形容詞に近接させるために行われる。ここで注目すべきは、of が個体ではなく概念を導くことだ。of 句では、概念の内部が重要である。of には、話者が自らの心の中をつぶさに観察しているイメージがある。

表1は、話しことば1,000万語と書きことば9,000万語を合わせたBNC(British National Corpus)¹全データ中で of と共起する動詞のトップ30とその生起回数である。全数は48,080である。

表1. 動詞+of

think, 6133	consisted, 951	known, 404
thought, 3061	know, 917	talk, 397
rid, 2216	spoke, 872	hear, 379
made, 2167	speak, 838	told, 359
consists, 2145	thinking, 686	go, 347
heard, 1709	died, 668	reminded, 341
accused, 1222	said, 630	speaks, 321
consisting, 1135	dispose, 555	informed, 310
composed, 1054	knew, 492	taken, 303
consist, 1008	make, 427	complained, 298

¹ コーパス検索では石井康毅の協力を得た。

動詞と of の組み合わせでは think、thought、thinking、thinks(226)を合わせて think が全 10,106 と圧倒的に多い。rid は get rid of X という熟語で現れる。この時 X は取り除かれる対象である。get rid のみでは名詞を取る力が無いため of を使って目的語に準じる項を追加した形だ。die of X では、X は死亡の原因を表す。意味の上では X kill Y の主語に準じる重要な項である。

make は Make of it what you wish.、What do you make of this?、I don't know what to make of your religion. など「作り上げる、みなす、理解する」の意味で make of として用いられる。この make Y of X の X は、SVOC 構文の目的語である O に相当する。たとえば次の ㉑-a の目的語が ㉑-b では of に後続している。

- ㉑-a Let's make this land a garden.
- ㉑-b Let's make a garden of this land.
- ㉑-c Let's make this land into a garden.

やや目を引く go との連結は let go of him/ my hand/ that career/ the past など「放す、放念する」の意味で let go of X として用いられる。ここでも X は、意味的にも統語的にも目的語に準じる。of は、当該名詞句が文要素に準じる意味役割を担うことを合図する。

この他には、概念の内部構造を示す of にふさわしく、「構成」を表す consist が 5239 に及ぶ。全体として、of 句を取る動詞には「思う」「話す」「構成」系が多いと言える。

次の表は同じく形容詞のトップ 50 とその生起回数である。全数は 50,836 である。形容詞の場合には、「何が」を表す名詞が full、short、free of などに続き、「何を」を表す名詞が aware、capable、guilty of などに続くなど、多様な結合が見られる。しかし、そのうち「何を」を補充するのは aware を筆頭に guilty、proud、afraid、conscious、sure、fond、unaware など「思う」系の形容詞が多い。

表 2. 形容詞 + of

aware, 6297	sure, 1002	reminiscent, 575
full, 5547	true, 952	ashamed, 461
capable, 4229	fond, 833	important, 425
short, 2175	incapable, 752	certain, 419
free, 1421	unaware, 748	wary, 391
guilty, 1346	clear, 661	devoid, 385
proud, 1241	worthy, 649	frightened, 369
afraid, 1160	critical, 640	suspicious, 360
typical, 1117	independent, 615	confident, 312
conscious, 1008	tired, 580	jealous, 262

動詞・形容詞と of の共起頻度に見られるこの傾向は、本稿が提案する of の意味と整合する。

11. 新たな分類、新たな言語世界

冒頭で述べたように、コーパス自体は言語事実の森であり、理論によって秩序が生まれる。理論が違えば秩序も違う。実際に、ここまでのところ、本稿の分類はリンドストロームバーグの分類ともラネカーの理論とも大きく違っていた。

本稿の観点からは、of が作り出す言語世界は次のように分類できる。表 3 は、本稿第 6 節以降をまとめたものである。

表 3. of の世界

1. 成員と集合	some of the houses; a row of trees; a kind of house // a cup of tea; a surprising amount of space
2. 個体集合	the field of linguistics; the City of New York
3. 個体と特質	the backdoor of the house; a friend of mine; the blue of the sky; the inventor of the telephone; the assassination of Kennedy
4. 1 と 3	a man of means; a woman of 37; a tale of horror; a sky of blue
	[メタファー] a giant of a man; a hell of a drive
5. 項の追加 できごとと個体	That was kind of you.; I dreamed of you.; conscious of the fact

参考文献

- Dirven, René. 1995. "The construal of cause: The case of cause prepositions," in Taylor, John R. & Robert E. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin: Mouton de Gruyter & Co., 95-118.
- Heine, Bernd. 1997/ 2006. *Possession*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Possession and possessive constructions," in Taylor, John R. & Robert E. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World*. Berlin: Mouton de Gruyter, 51-79.
- _____. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lindstromberg, Seth. 1997. *English Prepositions Explained*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 宗宮喜代子 2005. 「指示の意味論(序説)―日英対照言語学―」『東京外国語大学論集』第 71 号: 1-22.
- 寺澤芳雄(編) 1997. 『英語語源辞典』研究社.

コーパス

- BNC: British National Corpus.
- Henry, O. 2003. *The O. Henry Prize Stories*. New York: Anchor Books.